

がんの罹患（りかん）や死亡に関するデータの集計には、数年の時間がかかりますが、数学的な手法を使い直近の数字を予測する試みも行われています。国立がん研究センターが2017年に公表した17年時点の短期予測で、がん罹患率は年101万4千人、死亡者は年37万8千人でした。

同センターはがんの罹患数と死亡数について、39年までの将来予測も公表しています。現時点で利用できるデータをフル活用して得られた「がんの未来予想図」です。

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

これまで、がんは死亡数でも罹患数でも「男性優位」といえる病気でしたが、今後は男女の格差が埋まると予想されています。

男女のがん格差が縮小する大きな理由は、喫煙率の長期トレンドにあると思います。昨年の成人男性の喫煙率は28・2%でした。1966年の83・7%から50年で55%以上

このため、現在・過去・未来をフェアに比べるには、人口構成の影響を取り除く「年齢調整」作業が必要となります。年齢調整がん死亡率は男女とも減少の一途です。治療後の5年生存率が65%に達するなど、がん治療の進歩も寄与していると思われます。

他方、年齢調整がん罹患率は男女とも上昇傾向が続いています。肉食や運動不足といった欧米型のライフスタイルのほか、一部の「過剰診断」の影響もあると思います。また、妊娠や授乳は乳がんのリスクを低下させますから、少子化は乳がんを増やします。がんの「欧米化」はこれからも続きそうです。

罹患・死亡男女差は縮小

られます。20年後（35〜39年）の死亡数は、男性は約21万人で5%減ると見込まれますが、女性は約17万人と11%も増えると予想されています。がん罹患は現在、年平均で

男性57万人、女性は41万人程度です。これが20年後には男性で64万人、女性は53万人と推計されます。罹患数は男性で13%、女性はなんと3割も増えると見込まれています。

も低下したことになります。一方、女性の喫煙率は10%弱で横ばいのままです。

なお、がんは細胞の老化と老化が最大の増加要因です。

（東京大病院准教授）